

---

# インフィニット・ストラトスにリリカルなオリ主を突っ込んでみた

おしん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトスにリリカルなオリ主を突っ込んでみた

### 【Nコード】

N9081Q

### 【作者名】

おしん

### 【あらすじ】

ロストロギアのせいで教会騎士がインフィニット・ストラトスの世界の自分に憑依するお話

## プロローグ（前書き）

初投稿です

イメージで動く　じゃあぶんぶん飛び回る世界から人呼んだらすぐ  
くね？　飛び回るって言ったらリリカルなのはだよな　じゃあロス  
トロギアのせいでもいいか

ロストロギアさん万能ですね

## プロローグ

気づいたら第97管理外世界によく似た世界で幼児になっていた。  
そんな経験をしたのは数年前。

ただ、名前も同じ、父母の名前も同じ、そしてこの身体の記憶もし  
っかりある。

これは自分という身体に違う世界の自分がいると言っべきか。  
幸いなのはわからないが、そのきっかけにも心当たりがある。

ロストロギア「合わせ鏡の扉」

聖王教会に所属する騎士である自分にロストロギアを確保する仕事  
が回ってくるのはいつものことだ。

そして、いつものように違法魔導師を倒し、自分の副官に引渡しを  
行ってもらおうと思ったときにそれは発生した。

ロストロギアに掛けられていた封印の綻び、そして魔導師が戦闘し  
たことによる魔力刺激。

すなわちロストロギアの起動、いや暴走。

こっちへこようとすする副官を怒鳴りつけて封印にとりかかり

そこで記憶は途切れる。

十中八九あのロストロギアのせいだろう。

文字通り合わせ鏡の様に無限に広がる平行世界の自分に自分の意識

を飛ばしたのだ。

元の世界の自分どうなったのかと考えた所、最悪の場合死、もしくは意識不明のまま目覚めず。

最良の場合は意識だけをコピー、そしてそれを平行世界への自分に加えただけで普通に生きている。

しかし、結局の所考えても仕方ないという結論に達した。なにせ確認する手段がないのだから。

そして、この世界で生きていく事になった自分がまずした事は情報収集だ。

地図を見て管理局で有名な三人娘の出身地である日本をみて第97管理外世界だと思った、思ったのだが。

この世界にはトンデモナイものが存在していたのだ。

通称IS。正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。

「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能をみせつけたことから宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まる。

しかし女性しか動かせないという大きな欠陥があり、女尊男卑の風潮が広まりつつある。

軍事転用とはいつても昨今はもっぱらスポーツとしての枠に入りつつある。

まるで魔導師と非魔導師。

世界が変わってもこういう所は変わらないのかと苦笑した。

幸いにして母親がISの研究者だったためISの事を調べるのは事欠かなかった。

天才だのなんだのと騒がれても困るからこっそりと親が仕事でいない間だけ調べていたのだが、とある日に本を出しっぱなしにしたまま忘れてしまったのだ。

咄嗟に絵があるページを開いて母親に見せながら「お母さんの会社でこんな作ってるんだよね！」と言って誤魔化したのだが…

まさかその一言が始まりになるとは思わなかったのである。

元々自分は手のかからない子だったらしい、違う世界の自分の意識が入ってからは更に手がかからなくなった。

つまるところ共働きの親としては助かるが寂しいという存在であった自分がISに興味を持った。

そのISは母親の職場で見ることができ、自分の誕生日が近づいてきていたその時期故にプレゼントとして母親の職場見学もといIS見学というプレゼントが送られたのである。

ISという未知の物体を前に精神年齢的には年甲斐もなく、しかし外から見たら年相応の自分のはしゃぎっぷりを見て母親やその同僚たちは微笑んでいた。

そして言ってしまったのだ「これ、触ってみても大丈夫ですか？」と。

ISを起動させられるのは女性だけ、そうだったはずなのに

反応した、してしまった。

## ブログ（後書き）

見切り発車万歳。おしんです。

前書きにあるとおり初投稿です。

とりあえず空白含めて約1500字、メモ帳にして3KB。

プリリーグだしこんなものでしょうか。

どのくらいがいいのかわからないけど次は倍くらい目指してみます。

## 一話（前書き）

ベルカ ドイツ語 じゃあドイツでいいかって決めてラウラとかぶ  
ってることに気が付いた。

## 一話

ドイツに男性のIS操縦者現る、その名はヴォルフガング・ヒンメル。

その情報は世界を震撼させた。

女性のみが操縦できるという常識が崩されたのだ。

各国はこぞって第二第三の男性操縦者を発見しようと躍起になるが結果は伴わず。

男性IS操縦者の希少性を確認するだけとなった。

その渦中にいる自分は世界が変わっても似たような事をするのか、と諦めにも似た感情を持っていた。

あの後は大変だった。

ISが反応したけどどうしようか？と母に聞こうと振り向けば、顔を真っ青にする母とざわざわと広がっていく騒ぎ。

母はIS研究者である、つまるところ自分が辿るであろう未来が想像できてしまったのだろう。

なぜなら唯一の男性IS操縦者、そう唯一のだ。

軽く知識をつけただけの自分にだって想像がつく。

これまでと同じように普通の生活は、不可能。

隠すにしても既に多くの人を知ってしまった。

軍隊とかならまだしもただの企業、人の口に戸はたてられない。

故に、大々的に発表するしかなかった。

幸いだっただのは、母が勤める会社はISに関して上位クラスだったことと、社長さんが母の友人だったことだ。

中身はどうあれ自分の見かけは10歳児、管理世界のように就業年齢が下がっているのならともかくこの世界では幼すぎた。

社長さんも友人の子供を体のいい実験動物にはさせまいと色々頑張ってくれた。

まだ幼い子供に世界を飛び回せるのは忍びないし、皆さんも初の男性IS操縦者にさせたい事をまとめる時間が必要でしょう。

そういつて、2年間の猶予を引き出し、子供には親が必要ということとで母の同伴と研究参加を認めさせた。

それまでに必要な知識をつけ、12歳の誕生日から世界を飛び回る日々が始まる。

そんなことがあったのも今は昔、今は世界を飛び回る日々を送っている。

結構な過密スケジュールをこなす日々であるが、研究者というよりマネージャーとなってきた母がいるおかげで問題はない。

いや、IS研究という女性だらけの職場に中身は成人男性の自分がいることが問題といえば問題なのだが…。

何せ男は自分だけである、まだ子供とはいえ将来性は十分にあり、そして世界で唯一の男性IS操縦者という希少な存在。

つまるところ、お手軽な存在である自分が猫かわいがりされるのである。

子供だからと抱きつかれ柔らかいものを感じたりすることは日常茶飯事、中には一緒に風呂に入ろうとする人もいた。断固拒否したが。

どうにかして男性IS操縦者を手に入れたいだろう世界各国の思惑が透けて見える。

皆が皆そうではないにしろ、やはりそういった思いが先に来るのは心苦しいが仕方ないだろう。

ただ、母がいるからまだましな方なのだろう。いなければどんな手段で籠絡に乗り出してくる事やらわかったものじゃない。

しかしながらある時、そんな針の筵に座らされているような状況に光明が射した。

男性IS操縦者が新たに見つかり自分と合流したのだ。

名前をシャルル・デュノアと叫ぶかの有名なデュノア社の社長令息である。

これで少しは気が楽になると思ったのだ、思ったのだが。

実は女で本当はシャルロット・デュノアという名前だという事が判明したのはすぐ。

事情を聞けば、父親の命令だという。

まるで道具を扱う様なシャルロットの父親にはいい感情を持ちようがなく、きつかけはどうあれよき友人となったシャルロットの味方をするのは当然の事だ。

職場の皆や今まで知り合ったIS研究者、果てはお世話になった社長さんにまで連絡した。

その後紆余曲折あり、実家とは決別。そして高いIS適正のためにフランスの代表候補生となったが変わらず自分の相方ポジションにいる。

「まったく波乱万丈な人生送ってるよなあ…」

「どうしたのさ急にそんなこと言って」

休憩中に、今までの事を思い返してぽつりと呟いた言葉が聞こえたのかシャルが問いかけてくる。

「いや何、お互い色々大変だったよな、と」

シャルも普通とは言い難い難い人生を送っているし、自分なんて普通という言葉から遠くかけ離れている。

「いや、そんなしみじみと言わなくても…」

何かお年寄りみたいだよ、と付け加えられたシャルの言葉が胸に突き刺さる。

精神年齢でいえば四捨五入すれば40に入ろうとという所である、あるが。

まだ肉体は華の10代である。

精神は肉体に引っ張られるとは聞いたことがあるがやはり限度があるのだろう。

思わずむうと唸る。それがおかしかったのかシャルが小さく笑う。

何んというか複雑な気分だ。複雑な気分だが、足して割ればまだ20代だしいいかと納得する。

納得した所でぐいと手に持った紙コップに入っているコーヒーをおり、中身を空にする。

「まあ俺が年寄り臭いとかはともかく、そろそろ休憩終わりだシャル」

「うん、行こうかヴォルフ」

シャルと一緒に休憩室を後にする。

もう一頑張りするかと気合を入れながら研究室へと向かっていった。

## 一話（後書き）

倍の3000字目指したけど2000字くらいで止まってしまった  
でござる、おしんです。

今まで読む専門でしたが、いざ書く方になるとこんなに大変だった  
とは…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9081q/>

---

インフィニット・ストラトスにリリカルなオリ主を突っ込んでみた

2011年3月1日22時25分発行